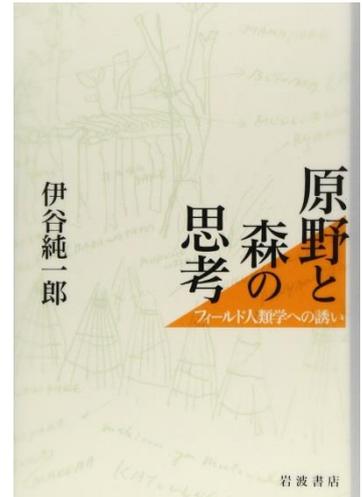


## 伊谷純一郎著 『原野と森の思考』

「高崎山のサル」で有名な著者が亡くなられて6年、この本は多くの著作の中から一向けのエッセーを関係者が没後に編纂したものである。副題が「フィールド人類学への誘い」とつけられているように、高崎山のニホンザルの研究から出発して、アフリカのゴリラ、チンパンジーからアフリカの大地に自然と深く関わりながら生活しているプリミティブな焼畑農耕民族、狩猟採集民族などの「なりわい」をフィールドに追いつけた著者のフィールド調査に対する哲学が、著者の少年時代に接した自然への思いやフィールド研究中に目に留めた些細なことがらなどのエッセーを通じて分かりやすく編集されている。原野と森を自分の足で彷徨し、その中の研究対象物である自然や動物や人に対して深い尊敬と敬意を払う「京大系・自然学」の伝統が行間に滲み出ている。



終章で、恩師今西錦司の思い出やその自然研究の態度、京都大学の霊長類研究の横断的組織などに触れつつ、現在の細分化された学問上の知見を人類の「知恵」として再構築するためには、子供の頃からの日々に体験してゆく等身大の世界への理解が重要と説き、特にフィールド分野に関してはそれぞれの専門分野の陥穿に落ち込むことなく、原理・原則よりもまずは現象を重んずる古くから「博物誌」と呼ばれてきた分野を再興することが、今後直面せざるを得ないことになる「学際」と「複雑系」に対処してゆくための唯一の道であると説いているが、けだし慧眼であろう。

多少専門的な記述もあるが、寝転がって読める章も多い。この本は山とは直接は関係ないが、著者は山に縁故ある方でもあるのでここに紹介した。

著者は英国王立人類学協会名誉会員、同王立トーマス・ハクスリー記念勲章授章。

岩波書店 2006 年刊

[「山書の小溪」目次に戻る](#)